ごあいさつ

この度、自法寺六世住職として晋山式を挙げさせていただけることとなりました。

顧みるに、当山のごとき骨山に住職したものにとって、晋山式などという大行持を修行するためには、克服しなければならない多くの課題がありました。しかし檀信徒の皆さまはじめ、関係御寺院のお力添え、ご尽力によって、無事この日を迎えることができたこと、ただただ感謝の一念であります。

晋山の準備・記念事業として、これまで大小さまざまな整備を行って参りましたが、そのひとつに、さほど広くない寺域を、山内に余分なものを置かずに活用できるようにと、仏具庫の設置をかなえていただきました。

また、出光文化福祉財団および恵那市の補助を受け、当山の所蔵文化財である佛涅槃図を修繕いたしました。ちょうど本年は明治百五十年の年にもあたります。苗木藩の廃仏毀釈に設立の遠因があるともいえる当山にとって、前身の洞泉寺時代からこの地の信者たちによって護り伝えられてきた涅槃図を、次世代へと安全に伝承保存できる形に修繕が整ったこと、幸甚の極みであります。またこの涅槃図は、今回親元のお役をお勤めいただいた仁志屋纐纈家（楠家）より寄進されたものであったことが、当該家の過去帳調査により判明いたしました。不思議な因縁を感じずにはいられません。

さらに本年は、ちょうど当寺のご開山である絶學祖廣大和尚の壱百回忌の年に当たります。このことは恥ずかしながら、直前に西堂長國寺様よりご指摘いただくまで、私自身全く気がつかないでおりました。偶然と言うにはあまりに出来すぎではないかと驚き、何度も記録を見直しました。

また、今回の晋山式に併せ、昨年年初に遷化した、先住五世中興大智隆輝大和尚の三回忌も勤めていただくこととなりました。当山の寺院としての威容を整えた、その功績は何者にも代え難く、この晋山式が無事円成出来るとするならば、それはまさに先代住職である師父のおかげであると言えましょう。

寺院とは公益法人であるがゆえに、その維持管理には公益性が担保されなければならないとは言いつつ、実際にはその護持を家族の問題としても抱えざるを得ないという矛盾を抱きながら、私自身、これからの寺院護持のより良きあり方を、模索して行きたく思います。

最後に、いつも気がつきすぎるくらいの心配りをし、そして誰よりもお寺の護持に尽力してきた母に、この場を借りて感謝の思いを伝えさせていただき、御挨拶とさせていただきます。

自法寺六世　新命　小栗隆博　合掌